

天文学とプラネタリウム

第101回



今月のお題

帰ってくる「一家に1枚宇宙図」

制作から5年、一家に1枚宇宙図を改訂することになりました。5年間の天文学（と私たち）の前進を盛り込みます。



www.tenpla.net

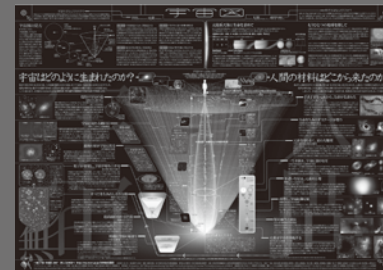
高梨直結 (東京大学)
平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

一家に1枚宇宙図 2007。2007年4月の科学技術週間に文部科学省から全国の学校に配布されたこの宇宙図、天プラは企画当初からこのプロジェクトに関わり、美術家の小阪淳さんや多くの第一線の研究者の皆さんと一緒に天文学の膨大な情報を取り込んで一枚の図に落とし込んでいきました。7か月の製作期間に交わされたメールは2000通を超え、「一家に1枚」と銘打つにふさわしい新しい宇宙の表現方法を紡ぎだすことができました。縦方向に時間の流れを、横方向に空間の広がりを取り、膨張する宇宙を「すりばち型」で、私たちが見ることのできる宇宙のわずかな範囲を「しずく型」で描いたこの宇宙図はその後いろいろな方の講演に使っていただいたり、台湾や韓国でそれぞれ繁体中国語や韓国語に翻訳されるなど、私たちの当初の期待を超える大きな広がりを見せました。今でも日本科学未来館などで販売が続けられています。

この宇宙図を作ってから5年、天文学は着実に前に進んできました。宇宙図の『もうひとつの地球を探して』の項にはこんな記述がありま

す。「天文学者たちは（中略）200個以上の太陽系外惑星を発見しています。しかし、もうひとつの地球と呼べるような惑星は、まだ見つかっていません。」今や発見された太陽系外惑星の総数は800に迫り、生命存在に適した温度を持つと推測される地球型惑星もいくつか見つかっています。一方遠方（つまり過去）の宇宙に目を向けてみると、2007年時点での「最古の天体」は128.8億年前のものですが、現在の最古記録は129.1億年。わずかな違いにも見えますが、着実に「宇宙の夜明け」に迫っているのです。これらはふたつとも国立天文台すばる望遠鏡による観測成果ですが、この間に行われた主焦点カメラの改良が記録の更新に大きな役割を果たしました。

さらに本誌先月号の連載100回記念コラムでもご紹介したように、狭義の科学としての天文学だけではなく、人類の宇宙観や神話なども含めた「宇宙と人間」の関係、「われわれはどこからきてどこへ行くのか」を描き出す「超宇宙図」プロジェクトもゆっくりと動き始めました。完遂することあるのかどうかすらわからない、大きなビジョンのプロジェクトと言えます。



写真は2007年版一家に1枚宇宙図。改訂版では豊富なボリュームはそのままに、新しい成果をよりスタイリッシュにお見せします。

とそんなところに、宇宙図の販売を行っている科学技術広報財団から「一家に1枚宇宙図」を改訂しないかというお誘いがありました。渡りに船、ふたつ返事でOKして制作委員会が再結集し、改訂作業を進めることにしました。超宇宙図のように全てを盛り込むわけにはいきませんが、上に述べたこの5年間の研究の進展を盛り込むのはもちろん、全体をブラッシュアップしてさらに魅力的な宇宙図へと改訂していくつもりです。ご期待ください。

望遠鏡ワークショップ好評開催中!